

いじめ問題について考える

— 子どもたちの声、大人たちの言葉から —

大河内 祥晴

1. いじめに苦しむ子ども達の叫び **『 本当の辛さは・・・ 』**
- ・居場所がなくなる辛さ

「マスクミが騒いでいるけど、誰も助けてくれない。私だって死にたくて死ぬんじゃない。一。一。」

「(物置が居場所に) あんなに暗くて狭い所なのに…安心するんです…死にそんな中でそこへ逃げ込んだ…」
 - ・耐えるしかない辛さ

「涙を見せたり学校を休んだりしないようにした。それが私のできる精一杯の抵抗でした」

「自分で解決するしかないと分かっているけど何もできない。笑ってごまかすしかなかった」

「(中学3年間いじめ) 高校に入ってある異変が…嵐が去っていったかのようにいじめに遭わなくなった」
 - ・打ち明けられない辛さ

「親には絶対相談できない。…これ以上迷惑をかけられないから……これ以上悲しませたくないから…」

「“いじめられている” = “嫌われていること” “恥ずかしいこと” …一番大好きな家族には言えなかった」

「誰かに相談してと言われると少し辛い。誰だっていじめられている自分を認めたくない」

「いじめを解決するのは本当に難しい。大人に言っても、かえって厳しくなるだけ…」
2. いじめをした子ども達の声 **『 いじめ行為が拡大・激化してしまうのは・・・ 』**
- 「面白かった、楽しかったから」 「遊びのつもりだった」 「やりすぎ程度の遊びだと思っていた」
- 「あいつを(聞かせてもらった手紙の子と)同じように傷つけていたかもしれない。
- でも、今まで、そんなことを少しも考えたことがなかった」
3. 周りの子ども達の思い **『 体感してきたいじめ(嫌な思い)から自身を守るために・・・ 』**
- 「だって、そう言わないとみんなから仲間はずれにされる」 (言葉遣いを親に注意された小1)
- 「(小学校)入学早々、娘が同級生から“ムシゴッコ”(無視して楽しむ?遊び)をされました。…」(お母さん)
4. 大人(社会)の認識 **『 25年前、13年前と変わらない実態 』**
- 「いじめについては本人の申し出があるかどうか一つの基準ではないかと思います」 (25年前の校長)
- 「先生はそばにいて見ているのだから、いじめに気づかないはずがない」 (25年前、同級生の証言(作文))
- 「これ(息子の机内私物へのイタズラ)は“いじめ?”だと思われますか」 (24年前、教員がお父さんに)
- 「(13年前) いじめは受け止め方によって違う。耐えられる子と耐えられない子がいる。だから難しい」
- 「(13年前) (息子への行為を見て) いじめだと思ったが気にしていないようだったのでそのままにした」
5. 子ども達の気づき **『 “いじめ”は何故いけないのか・・・ 』**
- 「いじめを見ても止めなかったということは、いじめを認めてしまっていたということ、そして
- あの4人と同じだということに気づきました」 (亡き次男清輝の同級生、一年後の手紙)
- 「(苦しむ子から届いた)手紙の内容を聞いて、いじめられている子がどんなふうに思っているのか、
どんなふうに感じているのかが私も少しわかりました」 (小6の感想文)
- 「私はいじめというものがどんなに人を苦しめるものかわかっていませんでした」 (中1の感想文)
- 「先生の注意で収まったいじめがすぐに再発…私たちが『いじめが許されない理由』を理解して
いなかった(教えられなかった)ことに原因があるのでは…」 (大学生が中学時代を振り返って)
6. 清輝の母校の生徒たちの自主活動“ハートコンタクト” **『 嫌な思いをさせない、しないために 』**
- 「清輝がいなくなって誰一人悲しまなかった人はいません。みんな苦しいです。悲しいです。これから大切な友達に喜んでもらえるように、いじめをなくしていきます。どうしたらいいのか…」(前述の同級生)
- 「今度(新任)の校長先生なら、卒業を止めて留年してでも、もう一度“ハーコン”をやり直したい」
- 「1年生に“ハーコン”の良さを伝えています」 (3年間、退任する校長の妨害に苦しみ続けたメンバー)